

# 被修飾語「の」の性質と機能

陳 訪 澤

## Summary

### The Nature and the Function of the Modified Word *No*

Chen Fangze

The modified word *no*, which follows the attributive form of *Yogen* or auxiliary verb and was called “formal noun” or “juntai particle”, can be distinguished as two different kinds based on the relationship between *no* and preceding clause. One is that can be put into the clause, and they form a “relative noun clause”. Another is that cannot be put into the clause, and they form an “appositive noun clause”.

When the appositive noun clause is placed at the comment of a cleft sentence, sometimes *no* must be replaced by *koto*, and sometimes the sentence will be ungrammatical even if it is replaced by *koto*. Relative noun clause has no such problem but *no* will disappear when the cleft-sentence transformation operation is made.

The point of how to distinguish a relative noun clause from an appositive noun clause is that whether *no* can be put into the clause or not. The judgment is not based on *no* itself but on the elements preceding or following *no* in the sentence. In the cleft sentence, because *no* is defined by the element of comment, all noun clauses in the topic are relative noun clauses. Since *no* only plays a role of grammar, it is just a symbol of clause. *No* in appositive noun clause is also defined by the element preceding or following in the sentence. As it is a semantic element, it cannot appear or disappear under grammatical operation.

Because the two kinds of *no* are different in nature and function, it is necessary to distinguish them in Japanese grammar education.

## 1. はじめに

日本語において、活用語の連体形（従属節）の後に出てくる被修飾語としての「の」は、一括して「形式名詞」または「準体助詞」と呼ばれ、「こと」、「もの」、「ひと」などいろいろな意味を表すものとして考えられてきた。

- (1) a 世界を一周するのは彼の夢だ。(こと)
- b 一緒に行かないのはよくない。(こと)
- c 本を読んでいるのは林君である。(ひと)
- d 彼が書いたのはよく売れる。(もの)

しかし、実際には次の文が示すように、何を表すか分からない場合もある。

- (2) a 指を切ったのはそのナイフでだ。(?)
- b 叫び声が出たのは葉子の口からである。(?)

一方、(1c)、(1d)と(2)の用例は同じ客観的な内容を表す次のような文になおし、「の」をなくすることができるのに対し、(1a)と(1b)の用例はそのような操作ができない。

- (3) a 林君は本を読んでいる。
- b 彼はよく売れるのを書いた。
- c そのナイフで指を切った。
- d 葉子の口から叫び声が出た。

本稿はこの「の」を二種類に分け、分裂文の形成との関連からそれぞれの性質と機能を明らかにすることが目的である。

## 2. 二種類の「の」

被修飾語としての「の」は、その前に来る従属節との関係によって、二種類に区別することができる。一つは「の」を構成要素として従属節の中に入れることができるもので、もう一つは従属節の中に「の」を入れることができないものである。例えば、次の(4c)と(4d)において、「の」を従属節の中に入れて、(4c)ではガ格、(4d)ではヲ格として機能することができるが、(4a)と(4b)においては、「の」を従属節の中に入れることはできない。

- (4) a 世界を一周するのは彼の夢だ。
  - \* [の] 世界ヲ一周スル
- b 一緒に行かないのはよくない。
  - \* [の] 一緒ニ行カナイ
- c 本を読んでいるのは林君である。
  - [の] ガ 本ヲ読ンデイル

d 彼が書いたのはよく売れる。

彼ガ [の]ヲ 書イタ

この二種類の「の」によって構成された名詞節は、連体修飾構造の同格節と関係節に対応しているので、これに因んで、(4a)と(4b)のような名詞節を「同格名詞節」と、(4c)と(4d)のような名詞節を「関係名詞節」と呼ぶことができる<sup>(1)</sup>。

### 3. 「の」の性質

まず、同格名詞節の「の」の性質を見てみよう。

(5) a それを剥がすのはつまり除名を意味する。(吉行淳之介『美少女』)

b 輸入米を国産米に混ぜるのは絶対に反対。(1993. 11. 17『北海道新聞日刊』)

c 外国語を使うのは難しい。(1993. 11. 26『北海道新聞日刊』)

これらの文は同格名詞節の格成分の主題化によって形成されたものである。格成分は分裂文の形成にあたって、述部の要素になりやすいものなので、(5)の文をもとに同格名詞節の格成分を述部に置いて分裂文変換の文法操作をしてみると、次のようになる。

(6) a 除名を意味するのはそれを剥がす \*の／こと だ。

b 絶対に反対するのは輸入米を国産米に混ぜる \*の／こと だ。

c 難しいのは外国語を使う \*の／こと だ。

つまり同格名詞節の格成分が述部に置かれると、被修飾語の「の」を「こと」に置き換えなければならない。しかし、次の用例が示すように、「の」を「こと」に置き換えても文が成立しない場合がある。

(7) a 太郎は飛行機が墜落するのを見た。→

太郎が見たのは飛行機が墜落する \*の／\*こと だ。

b 私は彼女がピアノをひくのを聞いた。→

私が聞いたのは彼女がピアノをひく \*の／\*こと だ。

c 正幸は背筋が寒くなるのを感じた。→

正幸を感じたのは背筋が寒くなる \*の／\*こと だ。

(7)は(6)のように、同格名詞節の格成分を述部に置いて分裂文に変換することはできない。(6)と(7)でこのような差が出るのは、次に示されたように、普通の文において、(8)の場合は「の」を「こと」に置き換えることができるが、(9)の場合はそうすることができないからである。

(8) a それを剥がすの／ことはつまり除名を意味する。

b 輸入米を国産米に混ぜるの／ことは絶対に反対する。

c 外国語を使うの／ことは難しい。

(9) a 太郎は飛行機が墜落する の／\*こと を見た。

b 私は彼女がピアノをひく の／\*こと を聞いた。

c 正幸は背筋が寒くなる の／＊こと を感じた。

名詞節における「の」と「こと」の区別について、今まで文法学者の間で盛んに議論されてきた。例えば、久野（1973）の「具体」と「抽象」の対立、Josephs（1976）の「直接、同時」と「間接、非同時」の対立、友田（1979）の「主観」と「客観」の対立、McCawley（1978）の「真」と「偽」の対立など、いずれも深い洞察力に富んだ優れた研究である。これらの研究は角度が違っているものの、本質的にはつながっていると言ってよい。ここでは今までの研究を踏まえて、分裂文との関連という違った視点からもう少し考えておく。

同格名詞節における「の」と「こと」の区別についての今までの研究は、主に普通の文における使い分けを中心に行われてきた。しかし、普通の文において「の」と「こと」に使い分けがあっても、分裂文に変換されると、すべて「こと」に置き換えられなければならないということは、上に見たとおりである。これには二つの原因があると、筆者は考えている。

分裂文は「倒置指定文」であるが、西山（1985）では「措定文」の解釈も可能であると指摘している。「措定文」とは、主題で表現（指示）する対象を、述部でもって叙述し（西山1985）、あるいは述部で表現する性質を持つ（上林1988）と述べる、という解釈を許す文のことである。したがって「措定文」において、述部の表現はある程度の抽象性と客観性を持たなければならない。同格名詞節の格成分が分裂文の述部に置かれると、本来の具体性と主観性の強い「の」が述部にとって異質なものになり、文を成立させるためには同質の「こと」に改めなければならないのである。一方、(7)のように「の」を「こと」に置き換えても文が成立しないのは、これらの用例の述語動詞が人間の五感に関する知覚動詞なので、主観性が強く、常に具体性のあるヲ格を要求するが、分裂文に変換されて、ヲ格が述部に置かれると、述部の性質に合わせて「の」を「こと」に置き換えた結果、具体性を要求する本来の述語動詞と抽象性しか持たないヲ格との間に不都合が生じたからである。つまり、知覚動詞を持つ分裂文において、名詞節が「の」のままでは述部の性質に合わないし、「こと」に置き換えられると本来の述語動詞と合わなくなるので、結局、「の」でも「こと」でも非文法的な文になってしまう、と解釈することができる。

これで、「の」と「こと」がそれぞれ具体性と抽象性の一方しか持っていないという性質は、分裂文の視点からも証明されたわけである。これは分裂文において、「の」をすべて「こと」に改めなければならない文法上の原因である。

もう一つは表記上の原因で、文末要素の「のだ」と関係があると思われる。

- (10) a ダンプが左に寄ってくれないことには、すれちがうことが出来ないのだ。（大藪春彦『名のない男』）  
b 美也子は末永卓の遠回しのプロポーズを断ったのだった。（森瑤子『砂の家』）  
c 堀沢は宿を出てからそのいずれかのバスを利用したのであろうか。（松本清張『山峡の章』）

これらの文は文末に「のだ」という要素がある。佐治（1972）では、文末に「のだ」のついた文を形式的な名詞文と考えており、「のだ」は構造的にも機能的にも「わけだ」「はずだ」「よ

うだ」「そうだ」などと同じような性質を持っていると指摘している。つまり、このような「のだ」は文の二つの側面から言えば、モダリティに属するものであると考えられる。しかし、同格名詞節の「の」は、言うまでもなく命題に属するものである。同格名詞節が述部に置かれると、形態上、モダリティに属する「のだ」と混同するおそれがあるため、「の」に最も近い「こと」が最適の代用表現として選ばれたわけであると考えられよう。

次に、関係名詞節の「の」は同格名詞節の「の」と違って、「こと」との使い分けの問題はない。関係名詞節において、被修飾語の「の」は意味が分かる場合と分からない場合とがあるので、「こと」に相当する場合は置き換えられるが、そうでない場合には置き換えられない。

(11) a 慎み深いのは今時はやらないわよ。(森瑤子『砂の家』)

慎み深いことは今時はやらないわよ。

b 君が運転しているのはよく故障する。(奥津1974)

\*君が運転していることはよく故障する。

c 道が舗装されたのは河童橋まで。(阿刀田高『面影橋』)

\*道が舗装されたことは河童橋まで。

d 警察にとめられたのは二日ぐらいだったわ。(松本清張『山峡の章』)

\*警察にとめられたことは二日ぐらいだったわ。

関係名詞節の「の」についても一つ注意されたいのは、分裂文に変換する文法操作のできる文についてその操作を行うと、「の」がなくなってしまうという点である。

(12) a 慎み深いのは今時はやらないわよ。→

今時はやらないのは慎み深い。

b 君が運転しているのはよく故障する。→

よく故障するのは君が運転している。

c 道が舗装されたのは河童橋まで。→

河童橋まで道が舗装された。

d 警察にとめられたのは二日ぐらいだったわ。→

二日ぐらい警察にとめられた。

(12c)と(12d)はもともと分裂文なので、この操作が行われると分裂文以前の普通の文に戻ることになる。したがって、「の」がなくなるのは当然のことである。この点は関係名詞節の「の」の機能と深く関わっていると思われる。

#### 4. 「の」の機能

同格名詞節と関係名詞節における「の」の機能については、学者たちの見解を見ながら、考えてみることにしよう。

分裂文の主題になっている名詞節をめぐって、今まで異なった二つの解釈がある。一つは、このような名詞節を「同一名詞連体」(本稿の「関係名詞節」)とする解釈である。例えば次の

ような文がある。

(13) 私が食べたのは四角いもちだ。

この文において、「私が食べたの」は「私が食べたもの」の意味であるから、この文を「私が食べたものは四角いもちだ」のように言い換えても、適格な文である。したがって、「の」は「同一名詞連体修飾」による被修飾語であるとはしか解釈できない、とされる<sup>(2)</sup>。

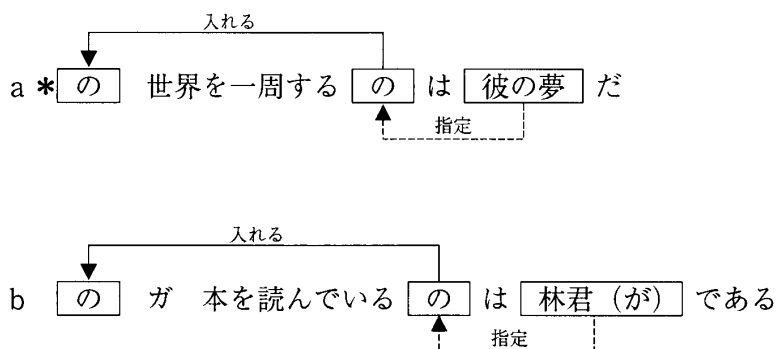
もう一つは、このような名詞節を「同格連体」(本稿の「同格名詞節」)とする解釈である。例えば次のような文を挙げている。

(14) 太郎がけんかしたのは次郎とだ。

この文において、「太郎がけんかしたの」を「太郎がけんかしたひと」に言い換えると、「\*太郎がけんかしたひとは次郎とだ」のような非文法的な文になってしまう。したがって、分裂文の主題の名詞節は関係名詞節ではなく同格名詞節である、と主張する<sup>(3)</sup>。

筆者は2節において、同格名詞節と関係名詞節を区別する根拠として、被修飾語「の」を従属節の中に入れることができるかどうかという点を挙げた。しかし、「の」を従属節の中に入れることができるかどうかという判断は、「の」自身によるものではなく、文における「の」前後の要素(分裂文の場合は述部の要素)によるものである、という点に注目していただきたい。つまり、「の」は述部の要素からある指定を受けているから、この「の」を従属節の中に入れることができるかを判断することが可能なわけである。例えば、(4c)において、「の」は「林君(が)」から指定を受けているので、従属節の述語との関係(ガ格)が想定され、その中に入れることができると判断される。これに対して、(4a)においては、「の」は「彼の夢」から指定を受けているため、従属節の要素との関係を想定することができず、その中に入れることができないと判断される。これを図で示すと、次のとおりである。

(15)



ここで注意されたいのは、分裂文において「の」が指定を受けているのは従来考えられているような述部の「意味」ではなくて、述部の「要素」であるということである。したがって、(14)の文においても、(15b)と同じように、「の」は「次郎と」の指定を受けているため、述語の「けんかした」とのト格の関係が想定され、主題の従属節の中に入れることができると考えられるのである。述部の要素が非名詞的な要素の場合でも、「の」はその要素の指定を受けることができる。

(16) a 男から花束をもらうのは初めてだ。(森瑤子『砂の家』)

b 目を覚ましたのはカサカサと鳴る紙の音によってであった。(大藪春彦『名のない男』)

(16 a)では副詞の「初めて」から、(16 b)では副詞節の「カサカサと鳴る紙の音によって」から、「の」はそれぞれの指定を受けていると考えられる。

すべての分裂文において、「の」は述部の要素の指定を受け、従属節の中の要素との関係が想定されるので、従属節の中に入ることができるということを考えれば、分裂文の主題となる名詞節はやはり関係名詞節と見たほうが妥当であろう。また、関係名詞節における被修飾語の「の」は実は「ひと」、「もの」、「こと」などを表すものではなく、前後の要素(分裂文の場合は述部の要素)の指定を受けて文法的な役割しか果たさないものだから、一種の従属節標識にすぎないと言えよう。

一方、同格名詞節の「の」も(15 a)が示したように、前後の要素の指定を受けている。しかし、関係名詞節の「の」が文法的な要素(つまり文節や文の成分)の指定を受けているのに対して、同格名詞節の「の」は語彙的な要素(つまり名詞)の指定を受けている。そのため、関係名詞節の「の」は文法操作によって現れたり消えたりすることができるが、同格名詞節の「の」は他の語に置き換えることができても、文法操作によって現れたり消えたりすることはできない。

被修飾語の「の」におけるこの文法機能の違いは、二種類の「の」を区別する決定的な証拠になっている。同格名詞節の「の」は語彙的なものなので、「形式名詞」の名がふさわしいと思われる。関係名詞節の「の」は文法的なものだから、「準体助詞」と呼ぶほうがよからう。

## 5. おわりに

本稿は、従来一括して取り扱われてきた被修飾語としての「の」を同格名詞節の「の」と関係名詞節の「の」という二種類に分けて、それぞれの性質と機能を検討した。同格名詞節の「の」は具体性や主観性などを持ちながら、命題に属するもので、機能的には「形式名詞」と呼ぶべきである。関係名詞節の「の」は具体的な意味を表すものではなく、文法的な役割しか果たさない従属節標識なので、「形式名詞」と区別して、「準体助詞」と呼ぶべきである。

以上の検討で分かるように、この二種類の「の」は性質的にも機能的にも異なるものなので、日本語の文法教育において区別して扱う必要があると思う。

### 注

- (1) 奥津(1974: 351-353)でも、「の」による名詞節の見分けについて本稿と同じような見解を示している。
- (2) 奥津(1974: 354)参照。
- (3) 近藤(1988)参照。



## 参考文献

- 上林 洋二 (1988) 措定文と指定文—ハとガの一面—, 『筑波大学文芸言語研究言語篇』(14号) 筑波大学
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 近藤 泰弘 (1988) 中古語の分裂文について, 『日本女子大学文学部紀要』(38号) 日本女子大学
- 佐治 圭三 (1972) 「ことだ」と「のだ」—形式名詞と準体助詞— (その二), 『日本語・日本文化』(第3号) 大阪外国語大学
- 陳 訪澤 (1994) 日本語の「の」による名詞節主題文の構造, 『国語国文研究』(第97号) 北海道大学国語国文学会
- 陳 訪澤 (1996) 『日本語名詞節主題文の研究——成分型関係名詞節主題文を中心に』, 北海道大学博士論文
- 陳 訪澤 (1999) 日語分裂句の種類及其特点, 『日語学習与研究』(1999年1期) 对外经济贸易大学
- 友田英津子 (1979) 名詞化要素「の」と「こと」の選択と視点, 『武蔵野英米文学』(12号) 武蔵野女子大学英文学会
- 西山 佑司 (1985) 措定文、指定文、同定文の区別をめぐって, 『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』(第17号) 慶応義塾大学
- 益岡 隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版

Josephs, L. S. (1976) *Complementation, Syntax and semantics* 5, New York : Academic Press

McCawley, N. A. (1978) Another look at *no*, *koto*, and *to* : Epistemology and complementizer choice in Japanese, *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha

(原稿受理 2002年7月25日)